

第9章 看護科の取り組み

I 昨年度の研究概要

研究テーマ 「生徒の進路実現に向けた授業の創造」

—表現力を育成するための言語活動の充実を図った指導の工夫—

成果と課題

研究授業後の生徒の自己評価結果から、自分の考えを持つことができた生徒の割合は97%、専門用語を理解することができた生徒の割合は100%であり、基本の知識を活用し、学習目標に対し、生徒自身の考えを持たせることができた。科学的根拠に基づき論理的に話しをするためには、基礎・基本知識や技能を確立させ、主体的に学習に取り組めるよう授業づくりが必要だと分かったことが成果である。

表現力を育成するための言語活動の充実を実現させるため、生徒が相手の立場や考えを尊重して話し合い発表できるよう授業場面を工夫し、コミュニケーション能力の向上が図られるよう授業改善を進めていくことが課題である

II 今年度の研究テーマ

「看護実践力を身に付けさせるため、思考力、判断力、表現力を育成するための授業内容の検討」
—言語活動の充実を図り、生徒の学習意欲の変容につなげる—

1 学習に関する意識調査から

(1) 実態

学習に関する意識調査（衛生看護科・専攻科の全生徒に対し、聴く・書く・話す・読むことに関する項目について、1当てはまらない、2どちらかと言えば当てはまらない、3どちらかと言えば当てはまる、4当てはまるとし、該当する数値を集計し平均値を調査する）では、「文章で話す」ことは3.01と高いが、「論理的に話す」ことは、2.8という結果で低い。また、「人前で話をする時、周囲の意識が気になり、発表することに躊躇する」生徒の割合はまだ高い。

(2) 分析と考察

授業内に「言語活動の充実」を取り入れることで生徒の行動変容を促し、看護実践能力の向上へとつなげていけると考えている。

2 研究の基本的な考え方

(1) 生徒に身に付けさせたい力

既習の学習内容を活用し、臨床現場の状況に応じ看護の実践ができる。

(2) 力を身に付けさせるための手立て

○シミュレーターや事例を活用し臨床の場を想定した授業の工夫

○生徒に思考の過程を言語化させるため、実習後の振り返り場面の工夫

○既習の学習内容を活用し、基本手技や知識と比較したり、関連させたりして看護場面の状況

に応じた看護の方法を身に付ける授業の工夫

Ⅲ 看護科研究授業学習指導案

- 1 日 時 平成 26 年 11 月 27 日 (木) 4 限 (11:50~12:40)
- 2 場 所 看護棟 1 階 511 号教室 (3 年生 HR 教室)
- 3 学 年 衛生看護科 3 年生 (39 名)
- 4 単 元 がんの治療と看護 薬物療法を受ける患者の看護
- 5 単元について

(1) 単元観

がんは、国民の死亡原因の第 1 位であるが、近年、集団検診の普及やがん治療の進歩によって早期発見・早期治療される場合や長期生存が可能となる場合が増えてきた。がん患者はがんとともに生きる、がんをコントロールしながら人生を送るという考え方にかわりつつある。抗がん薬を用いる薬物療法の分野では種々の薬が開発され、日々目覚しく進歩している。

がん患者の看護を行うためには、がんの特徴を知り、がんの治療と患者の身体的・心理的問題を理解し、看護を行うことが必要である。単元を通して、薬物療法の特質に応じた看護の意義や役割の重要性を理解させることをねらいとしている。

(2) 生徒観

生徒は 5 年一貫看護教育の 3 年生であり、看護師国家資格取得を目指し、1 年生から「基礎看護」「看護基礎医学」の学習を継続している。2 年次には「疾病と成り立ち」「薬物と薬理」について学習し、2 年次から 3 年次の 7 月までに、脳神経、運動器、呼吸器、循環器などの代表的疾患とその看護について学習している。授業前のアンケートでは、95%の生徒はがんが国民の死亡原因 1 位だと理解している。50%の生徒は看護臨床実習において、がんの既往歴のある患者、またはがんの治療中の患者を受け持っている。このことにより、生徒はがんに対して漠然としたイメージを持っており、がん患者とその治療や看護の具体的なイメージができていないと考えられる。

(3) 指導観

薬物療法を受けるがん患者の事例を活用し、がん患者とその治療、薬物療法による副作用を具体的にイメージさせたい。そのために、骨髄の働きを既習の学習から整理させ、薬物療法の副作用である骨髄抑制によって起こる症状を理解できるよう、段階的に思考を整理しながら学習できるよう工夫した。そして、事例患者を用いることにより、がん患者の日常生活行動から看護を考えさせたい。また、ワークシートに自己の考えを整理して記入し、グループワークで他者と意見交換を行い、思考した内容を発表することで思考、判断、表現力、がん患者の看護実践力を身に付けさせたい。

6 単元の目標

- (1) 薬物療法を受けるがん患者に対する心身両面の理解を深める。
- (2) 薬物療法を受けるがん患者とその家族に対する看護の特徴を理解する。

- (3) 薬物療法を受けるがん患者の状態や治療の特質に応じた看護の方法について思考を深め考えを表現できる。

7 単元の評価規準

関心・意欲・態度	思考・判断・表現	技能	知識・理解
<p>・がん患者に対する薬物療法の概要とその副作用について、看護との関連において関心を持つ。また、がんとその治療に伴う患者の心身の苦痛を理解し、患者の状態や治療の特質に応じた看護について主体的に取り組もうとしている。</p>	<p>・がん患者に対する薬物療法の概要とその副作用について、看護との関連において思考を深める。また、がんとその治療に伴う患者の心身の苦痛を理解し、患者の状態や治療の特質に応じた看護を適切に判断し考えを表現している。</p>	<p>・がん患者に対する薬物療法の概要とその副作用について、看護との関連においてその意味を読み取り整理し、まとめている。また、がんとその治療に伴う患者の心身の苦痛を理解し、患者の状態や治療の特質に応じた看護技術を身に付けている。</p>	<p>・がん患者に対する薬物療法の概要とその副作用について、看護との関連について基本的な知識を身に付けている。また、がんとその治療に伴う患者の心身の苦痛を理解し、患者の状態や治療の特質に応じた看護の意義や役割の重要性を理解している。</p>

8 指導と評価の計画（全5時間）

時間	学習内容	評価					
		関	思	技	知	評価規準	評価方法
1時間	がんの化学療法の適応 抗がん薬の種類	◎			○	<p>・がん患者に対する薬物療法の概要とその副作用について関心を持ち、看護との関連を学習する意欲を持っている。</p> <p>・がん患者に対する薬物療法の概要とその副作用について基礎的な知識を身に付けている。</p>	授業観察 ワークシート 定期試験
1時間	抗がん薬の投与方法 抗がん薬と薬時の看護			◎		<p>・がん患者に対する薬物療法の概要とその副作用について理解し、患者の状態、治療の特質に応じた援助の持つ意味を読み取り、記録・整理しまとめている。</p> <p>・がんとその治療に伴う患者の心身の苦痛を理解し、患者の状態、治療の特質に応じた援助を科学的根拠に</p>	授業観察 ワークシート 定期試験

						基づき行うことができる。	
1時間	抗がん薬の副作用				◎	・がんとその治療に伴う患者の心身の苦痛を理解し、患者の状態や治療の特質に応じた看護の意義や役割について理解している。	授業観察 ワークシート 定期試験
2時間 (本時1/2)	抗がん薬の副作用と看護		◎			・がん患者に対する薬物療法の概要とその副作用について、看護との関連について思考を深めることができる。 ・がんとその治療に伴う患者の心身の苦痛を理解し、看護者に必要な態度や具体的取り組みについて思考、判断し、表現できる。	授業観察 ワークシート 定期試験

9 本時の授業

(1) 本時の目標

がん患者の薬物療法による骨髄抑制に対する具体的な看護援助について考えることができる。

(2) 学習の展開

	学習活動	指導上の留意 (◇) 努力を要する状況と判断した生徒への手立て (◆)	評価規準 (評価方法)
導入 5分	1 授業を始める姿勢をつくる。 2 本時のめあてを確認する。	◇学習に必要な教科書等が準備できているか各自で確認させる。 ◇今日の授業は「事例患者から、薬物療法の副作用である骨髄抑制によりどのような症状が患者に出現するかをまとめ、予測される症状を予防するために必要な援助を考える。」ということを目指していることを確認させる。	

展 開 40 分	3 骨髄の働きを復習する。	◇復習プリントの記入内容を確認させる。	<ul style="list-style-type: none"> ・がん患者に対する薬物療法の副作用である骨髄抑制により予測される症状が、患者の心身にどのような苦痛をもたらすか思考したことをワークシートにまとめている。 ・教科書や事前課題のプリントの内容をもとに自ら思考し自分の言葉で記入できる。 (授業観察・ワークシート記入)
	4 思考過程を示す。 ・骨髄抑制によっておこる血小板減少症について説明する。	◇復習プリントを用いて血小板が減少するとどのような症状が起き易いか、また、予防するための援助を生徒に発表させ、教員が生徒の発表に助言を加えながらまとめさせることで思考過程を認識させる。	
	5 白血球減少から予測される症状をワークシートに記入しながら考える。	◇白血球減少により感染症を起し易い状態となるということを理解させる。 ◆ 事前課題の血液の働きのプリントを参考にするよう声をかける。	
<p>○生徒のまとめ例</p> <p>「患者は感染症を起し易い。なぜなら～」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・骨髄抑制により、白血球の産生が抑制される。 ・白血球のうちとくに食菌作用を持つ好中球が減少すると感染を起し易い。 ・患者に喫煙歴があることから、呼吸器感染症の予防が重要である 			<p>薬物療法の副作用である骨髄抑制によって起こる症状が、患者の心身にどのような変化をもたらすか思考した内容から、患者の日常生活をイメージし、具体的に看護を考え、グループで発言できる。感染の3原則</p>
6 グループ協議を行う。 ・ 感染症を予防する看護を考え意見交換をする。	◇患者の1日の生活をイメージして実践可能な援助計画を考えるよう説明する。(副読本の活用も可) ◆机間指導によりグループワークに参加できない生徒を把握し、事前課題や副読本の見直しをさせながら自分の考えを持って参加できるようにする。		
<p>○生徒のまとめ例</p> <ul style="list-style-type: none"> ・環境調整 ・手指の清潔の方法を指導する ・口腔ケアの方法 (うがい, 歯ブラシの選び方, 回数) ・面会の制限 ・身体の清潔を保つための援助 等 			
	7 グループ発表を行う。	◇発表後教科書を用いて内容を確認する。また、看護が感染の3原則に応じた内容か生徒に考えさせる。	

ま と め 1 0 分	8 本時のまとめ 骨髄抑制による白血球減少から予測される感染症とその予防について整理する。	◇ワークシートに薬物療法による骨髄抑制に対しどのような看護が必要か、考えた内容を整理して記入させる。	に基づき再度思考し、看護を考え、発表できる。 (グループワーク 観察・ワークシート記入、発表)
	<p>○本時の気付き例</p> <ul style="list-style-type: none"> ・骨髄の働きや血球成分の予習から薬物療法による作用、副作用を考えることができた。 ・考えた副作用をもとに具体的な援助を話し合うことができた。 ・血小板減少症や赤血球減少等他の症状も合わせて考えないといけない。 		
	9 授業評価アンケート		

IV 研究授業後の取り組み

1 研究協議について

<p>授業者より 指導の工夫等</p>	<p>生徒が臨床実習経験と既習の人体と看護や基礎看護の知識をもとに、事例から「がん患者の薬物療法による骨髄抑制に対する具体的な看護援助」について考えられ、発言するように促した。貧血・血小板減少については、前時までに学習を済ませておき、本時は易感染性に絞った。白血球減少と易感染性については前時でも触れていたが、生徒からは煙草や年齢のキーワードからも回答の発言が出てこなかった。しかし「感染の3原則」を示した事で活発に発言が出た。この「感染の3原則」と「根拠をもって考える」ことを、本時の重点目標に考えていた。授業準備として、板書するもの、答えが予測されるもの、書いたものを貼る、説明するものに分けた。時間内に終了したが、2時間に分ければ内容が深まったと思う。</p>
-------------------------	---

<p>協議・助言等の内容</p>	<p>・事例を提示されており、生徒は臨地実習と授業を結び付ける患者の具体的なイメージが描けていたようだ。生徒にヒントを与えながら答えを引き出され、科学的根拠を深めたわかりやすい授業である。必要な看護援助につなげる思考過程について、図に示すようにされると、思考の道筋ができた。生徒が話しをしたり、考えたりするグループワークの机間巡視の際に「わからない事はないですか」と促がされたらよかった。事例に現在の症状（咽喉が痛い。ご飯が食べにくい。マスクが嫌だな。）があると看護につなげられた。免疫力をつけるには「食事のバランス」という生徒のよい回答があった。一般的なところから個別につなげ、「どうしたらいいの？」と発問して思考を深めさせるとよい。生徒を巻き込むようにする。易感染性の要因が出にくかったため、先生がヒントを出されたが、問題を抱えたまま（プログラムジレンマ）、問題となっている症状や状態から感染について気付かせる方法もあったかと思う。</p> <p>・授業手法について、板書・時間管理・思考させる発問を工夫されていた。内容については、骨髄抑制症状の観察についての関連の幅を広げられるとよい。最初の発問のあと、前後でペアになるなどと指示をされるとよかった。個人→グループ→個人で思考を促がされていた。先生のまとめがしっかりされていたのもよいが、学びを生徒に口頭で発表させていた点がよい。「生徒の声が小さい」「しっかり発表させる」については、科で統一して考えるべきである。</p>
<p>今後の課題</p>	<p>・生徒と教員の間答などの活発な話し合いの場面があると、この場面を見ることによってさらに思考が深まると考える。</p> <p>・内容について、骨髄抑制の肺炎と誤嚥性肺炎の要因の違いを示すなど多角的な思考を深める。</p>

V 今年度の研究を終えて

今年度は研究主題「看護実践力を身に付けさせるため、思考力、判断力、表現力を育成するための授業内容の検討」、研究副題「言語活動の充実を図り、生徒の学習意欲の変容につなげる」とした。思考力、判断力、表現力を育成するための言語活動の充実を実現させるため、生徒が相手の立場や考えを尊重して話し合い発表できるよう授業場面を工夫し、コミュニケーション能力の向上が図られるよう授業改善を進めていくことを課題として授業研究に取り組んだ。

研究授業では「言語活動の充実」を取り入れることが生徒の学習意欲の向上につながり、生徒の行動変容を促し、看護実践力の向上につながるという仮説を立てた。研究授業の前には、学習指導案の事前協議を行い、既習学習を確認し、教材検討を行った。教材では、臨床の場を想定した事例の工夫を行い、人体のしくみと働きや基礎看護の既習の内容をもとに思考過程がイメージ

できるようなワークシートを作成し、個人ワークからグループワークで自身の思考を表現し、更にグループで話し合い、思考を深めて発表するという手立てを用いて検証を行った。

検証結果としては、研究授業終了後の生徒の自己評価において、「意欲を持って真剣に学習できた。」という項目に生徒全員が当てはまると答えた。授業後の感想では「今後も事例患者を用いて具体的な看護を考えたい。」や「患者をイメージできわかりやすかった。」という記載が見られた。また、生徒の看護臨床実習に関するアンケートの「実習を通して学びを得たと感じる事ができた。」という項目では、3年生8月～11月実習1クールは「大いに感じる事ができた。」と答えた生徒は77%だったが、3クールは95%と大きく上昇している。生徒は実習を重ねることで学びが深まると感じていることがわかる。しかし、研究授業終了後アンケートで、「自分の考えを持つ」という点で、当てはまると答えた生徒が70%、「質問されたら、根拠や理由とともにその答えや自分の意見を述べる事ができる」という点で、当てはまると答えた生徒が38%と低くなっている。

授業観察者からは、事例を提示することで生徒は臨床実習と授業を結び付け、患者の具体的なイメージが描けていた。生徒が科学的根拠を深められたわかりやすい授業だったという意見をいただいた。

こうした研究授業は、看護臨床実習が終了し、根拠を基に考えるという思考を繰り返している3年生には興味を持って意欲的に取り組めた点、事例を用いて具体的な看護を考えさせるという点で成果が挙げられたと考えられる。しかし、自分の考えを持ち、自らの看護援助を根拠や理由とともに説明できる生徒の割合が少なく、課題があるといえる。

今回の研究授業では、授業の事前協議を行うことで、生徒の発達段階に応じた授業ができ、学習意欲や学びあう力に働きかけることができるという授業改善の手がかりを得ることができた。今後は学習指導案事前検討会を充実させ、指導方法や評価の焦点化を図り、生徒の学習意欲に働きかける授業改善を進めていきたい。